

『靈交』にあとがきを記す。(5)¹⁾

香川県大島の療養所をあらわす点描

阿部安成

Yasunari Abe

滋賀大学 経済学部 / 教授

作新

『靈交』は1933年の新年号から、巻号表記ではなく通号数のみを用いることとなった。以前の表示にもどったのである。それについて特段の告知は紙上にない。連載の前回でみたとおり、『靈交』は、第156号(1931年10月1日)のつぎが第1巻第1号(1931年11月10日)となった。霊交会教会堂図書室に残るその号の最初の頁(題字のある頁)の左うえの余白には、手書きで「第157号」と記されている。その後、第1巻第14号(1932年12月10日)のつぎが第170号となったのである。第1巻の表示がついた号が14号までだったのだから、そのつぎの通号数は171となるはずである。この数えまちがいは正されることなく、廃刊まで1つずれた号数がついたままとなる。1932年最後の発行号(第1巻第14号)の「編輯後記」には、「昭和八年よりは霊交も面目を一新しまして、精々みな様の御愛読に添ひ得るやうに致し度い」と記されていた。その一新の1つが号数表記の変更となった。

『靈交』第175号(1933年6月10日)には、ほぼ2頁分となる長文の「霊交会内容」が掲載されている。「霊交会を一寸と御紹介いたします」と始まる文章は、「会員心得」「会員の種類」「会の事業方面」「祈禱題目」「こゝに兄弟あり」の5つに分かれている。ここにみえる会員心得は全12条の条文で構成されている。べつの機会にみたとおり、霊交会は聖書を会則とするのだが、ここにあるような会員にとっての決まりも定めていた²⁾。こうした会の規約は時期によってが一定しない。それはともかく、ここにあらためてみずからを省みることにより、それを面目一新の梃子としようとしたのだろう。このとき会員数は65名、『靈交』の発行部数はおよそ600で、「満洲から朝鮮及び内地は各方面に広く愛読されて居ります、英米へも送つて居ります」と

「『靈交』にあとがきを記す。」(1)『彦根論叢』第378号(2009年5月)掲載
 「『靈交』にあとがきを記す。」(2)『彦根論叢』第379号(2009年7月)掲載
 「『靈交』にあとがきを記す。」(3)『彦根論叢』第380号(2009年9月)掲載
 「『靈交』にあとがきを記す。」(4)『滋賀大学経済学部研究年報』第16巻(2009年11月)掲載

1) 本稿は2009年度財団法人福武学術文化振興財団
 瀬戸内海文化研究・活動支援助成による研究題目
 「瀬戸内海域のハンセン病療養所における
 情報集積と交流」の成果の一部である。

いう読まれ方をしていた。記念会がおこなわれる11月発行号の『霊交』（第180号）には、「霊交会歌」も掲載されている。

穂波はこの1933年を、「私個人としては療養所生活二十五年目であり、霊交会としては二十年目であり」と数え、自著『回春の太陽』をその「能い記念の賜」ととらえている（穂波生「回春の太陽を世に送るについて」R180）。こうした区切りよいときだからだろうか、穂波は「編輯後記」（同前）に、「出来る事なら『霊交会の歴史』でも書くが、私の自伝を書くか致し度いと存じますが、神旨でなくはペンは執らない」との思いを残していた。

穂波の夏

穂波はよくよく夏が好きなのだろう。「愛する夏が参りました〔中略〕『いゝ時候だなアー』（R:175_33）、「夏を何故に愛するか、神鳴の轟々たる音が好き、電光のキラメクのが好き、白雨の肺然として注ぐが好き」（R:177_33）、「編輯子は夏を断然よしと頑張ります。不自由な手足が裸で動かし良いからであります」（R:189_34）というぐあいだ。1933年の夏に穂波は、初めてマスクメロンを食べた。

今日、愛生園より贈られたとて、マスクメロンと言ふものを見た。所が学芸部長が、報知社長だからとて一片を呉れた。生れて始めて口にするのだ。書物では読で居たが、其処でサン身の如くに切つて記者連と試食した、味の知れない内にノドを過ぎた。皆うれしそうに笑った。ソシテ香気をほめ、味をほめ、水分をほめ、百年も生きのびる程の滋養があるやうに言ふ者もあつた。

との驚きと喜びが記されている（R:178_33）。

ここにいう「報知社長」とは、『報知大島』の編集をめぐる事態を指すのだろうか。この年の夏から穂波は、「患者自治会の機関紙の主筆を申附か

つて」いた（R:175_33）。

報知大島紙の編輯と、霊交の編輯と、評議員の自治会のつとめと、俳句の選評と、短歌の会と、修養団の向上会と、日曜学校の教授と、集会の感話と、聖書研究と、一日平均に二通の手紙の返事と、面会人と、各地への原稿と、雑略が斯る恩寵である。（R:177_33）

と、好きな夏に多忙を極める穂波だった。霊交会に残る『報知大島』の綴りの1つには、その表にペンで「第二十五号＝第四十五号／報知大島 附共楽団々報／編輯人 長田穂波」と記してある。第25号は1933年5月1日発行、第45号は1934年3月15日発行³⁾。穂波の『報知大島』編集担当の期間は11か月だった。

ペンと手

べつに書いたとおり、穂波は手が利かない。ペンをとるたびに、「『何ぞよき自分向きの』ペンはなきかと考えさゝれる」という。穂波は「普通の万年ペン」を使って、『霊交』という生命体を産みだしている。

どうやら今号も生れ出た、小さしとは言へ一個の独立誌だと思ふと力が入る。殊に神の器たらむとの希願に祈り祈り、微力な者は骨が折れる。記し終ると大感謝を捧ぐるのである。（「編輯後記」R192_34）

こうしてつくられる『霊交』が1000部の発行となった（「編輯後記」R190_34）。

【資料】

係「感謝欄」『霊交』第170号、1933年1月10日

「一、金壺円也、京都市、五味きくゑ様／一、金式円也、群馬県、高橋音市様／一、金式拾円也、東京市、富山タヲ様／一、金拾円也、高松市、エリクソン様／一、金拾円也、高松市、モーア様／一、金七円也、高松市、東教会様／一、金壺円也、高松市、

2) 阿部安成「資料紹介 長田穂波日記 1936年－療養所の中かの生の痕跡」(4完) (『彦根論叢』第375号、2008年11月)を参照。

3) 霊交会が所蔵する『報知大島』の目録は、阿部安成「ゆくりなくも－国立療養所 大島青松園キリスト教霊交会 2009年4月・5月調査報告」 (滋賀大学経済学部Working Paper Series No.113、2009年6月)を参照。

大塚干男様／一、金五拾錢也、高松市、中野太助様／一、金壹円也、大阪市、西田五郎様／一、金貳拾円也、倉敷市、林源十郎様内／葉王会様／一、金拾円也、高松市、エリクソン様／一、金壹円也、高松市、森川なか様／一、金貳円也、東京市、田中儀三郎様／右、有難く頂戴致し厚く御礼申し上げます、係」

*「編輯後記」同前

「○前頭が禿げ込んで博士禿だとか東京禿だと他人は合評して呉れるが、自分としては年数を幾歳だと言ふのが恥しい程になった。然し元日の朝日を受けて、前頭よりピカリと反射するかと考えると、我が頭ながら光々しくも感ずるので、微笑せざるを得ません。ハイ新年で御芽出度う御座います。／○本屋の話には、近頃は理論にアキたとて、軽い読み物、ことに信仰談物を求める人が増して来たとの事だが、理論は解しても実行は望まれない。すると、迷信の何のと言つて見ても、喜んで現に暮しつつある体験は、不思議でもあれば懐かしくなつて来るのかな。理屈では腹はふくれないとは、實際だかなア！○他所で済みし時分に鳥は流行して来る、何分海越しての事だから無理もない。目を丸くして議論争ひをやつて居る顔を見ると、胸の何処やらに微苦笑がクスリ、これ失礼な、お向ふは真剣なんだよ、ハイお芽出度う。／○皆さま今年も御厚情を願ひ上げます。」

*「感謝欄」『靈交』第171号、1933年2月10日

「一、金壹円五拾錢也、倉敷市、井上孝子様／一、金壹円也、下関市、坂本皆之助様／一、金拾円也、神戸市、青木歌子様／一、金壹円也、平塚市、山本徳義様／一、金貳円也、高知市、玉井友治郎様／一、金壹円也、金沢市、中島郁夫様／一、金参円也、岡山市、深見幸雄様／一、金五円也、神戸市、聖書教会様／一、金参円也、群馬県、内田久治様

／一、金貳円也、松山市、青野兵太郎様／一、金壹円也、京都市、高瀬時助様／一、金五円也、高松市、奥村清一様／一、金五円六拾四錢也、丸亀市、雑賀町日本／キリスト教会様／一、金参円也、善通寺町、日本基督教会／日曜学校様／一、金四円五拾錢也、京都市、京都教会日曜学校／長丹羽喜隆様／一、金壹円也、朝鮮、高島亀太郎様／一、金壹円也、高松市、高橋七五三様／一、金八円也、高松市、三番町教会様／一、金貳円也、大阪市、広瀬広治様／一、金壹円也、多度津町、鹿角義助様／一、金壹円也、広島県、栃木英夫様／一、金拾円也、岡山市、田中文男様／一、金参円也、千葉市、小島伊助様／一、金壹円五拾錢也、姫路市、芳賀留之助様」

ホナミ^(マ)「編輯後記」同前

「○宗教上の七は完全の数で、八は発出の数と成つて居ります。本年は発出即ち創造の年であり、活動であり、進出の年でありますから、元旦より御用多でありました、其上に大きな責任ある原稿をも請合ひました。それに『汝はキリストの栄光なり……彼れを現はせ』と聖言を賜つたので、内部が張り切つて居ります。何せ今年は、沢山の力と沢山の働きを賦与されると確信して迎へて居ります、何卒皆さんの御加禱をお願い申し上げます。／○神に住む者はスタリがないのですね。私は使命観で一杯だ、有難いことですなア。ウンとやるのですナ、避けてはなりませんよ。それ持てる者は、尚与へられ、持たぬ者は、その持てるもの迄もとらるべしですからね。神に不景気は有りませんよ。不景気だ不景気だと青い顔しないで、信仰を為ることですね。神だけだ、大丈夫なのは……／○哲学書も読みたいし、羅馬衰亡史もギボンのも借りてあるし、化学の書も見たいし、雑誌も覗きたし、早く日が長くなると良いと思ふ、私は四、五年の間と言ふも、今日は

日永で困つたと思ふたことはない。古本でも中には掘出しものがある、ウンと買つて、ウンと読んで、ウンと書きたい、資金が欲しい等と考へる程だから、多忙に閉口はして居ないらしい、屁古駄札たら死ぬ時であるに間違ひない。／○外へ出られぬならば、自分の内を掘つて行く、働き場所は何処にでもある、鶯よ早く鳴いて聞かせて呉れ、花よ早く香をつて見せて呉れ、君らは詩の世界の王様だね。私の先生だ。一寸の暇に詩作します。あなた方が教へて止まないから。松吹く風も磯打つ浪も、皆詩でないものはない、神の賜でないものはない。霞棚引く頃には何か具体的な感謝の献物を仕上げたいと祈つてゐます。／○靈交誌を何卒御愛用下さい、祈りに物資に御援助を願ひ上げます、最一進しまして全く面目を改め、神の栄光を器たり得たいと祈つてゐます。／皆様の御幸福を祈ります。」

＊「感謝欄」『靈交』第172号、1933年3月10日

「一、金弍円也、東京市、宇津木勢八様／一、金壹円也、小樽市、飯塚貞治様／一、金弍円也、東京市、藤本武平二様／一、金五拾錢、東京市、水野国次様」

＊「編輯後記」同前

「○寒いと言ふ内にも何処かに春が覗いて居るやうだ。頭髮をクルリと剃ると、海江る風が冷たく撫て行く、そいつ面白く思ひつゝ、ペンを運ぶのも嬉しいものだ。編輯が済んだら手拭でもかむるとせう、ハツクシヨン、風邪奴が這ひ寄つて来たらしいぞ、ハツクシヨン／○『回春の太陽』と題して、リデル嬢と三宅俊輔師の事跡を記した癩事業家及一般人の参考資料と信じる。近く培文堂森書店より出版せられませう、是非御一読を乞ふ、伝道用としても確に活ける神の活信仰の良き証言と信じてゐる。／○山に新しく道が大島青年団によりて通じた、海の公園の心臓を展望する一步毎に迫り来る絶

景の変化は、屋島に負けない、『皆さん、御光来下さい』、良き御馳走が出来ました。更に裏道が開けたなら、表何景裏何景と宣伝以上の眺めと成ることを疑ひません。／○春は神に捧げないと放蕩に流れ易い。だが今月は、原稿が多く集つたので嬉しい。街に花の下に放蕩の座を先に占領して高声に福音を叫ぶべしだ。常にサタンより一步先に勇ましく進軍いたして下さい。／では、皆さん御機嫌よろしく……さようなら!」

＊「感謝」『靈交』第173号、1933年4月10日

「一、金参円也、倉敷市、高戸猷／一、金参円也、神奈川県、堤薰一様／一、金弍円五拾錢、高松市、西村勝美様／一、金弍円也、兵庫県、名和金太郎様」

保奈美「編輯後記」同前

「○福音に甦されし生命が、福音を離れて何に活き得やう。体験の神を信ずる者が活ける神より何として離れ得られやう。孤島の空に祈る靈に受けし聖示は、証叫せざるを得ない生意気のやうであり、出過ぎのやうでもあるが、止むを得ない。怒らないでお読み下さるやうに願ひ致します。／○この靈交で皆さまにお目にかゝる時分には、花も笑ひ鳥も唄ふ陽春の中でありませうが、編輯の手が今は凍るのを覚えます。信者は勇ましく聖戦の軍を推し進めまして、積極的に福音の華を地上に咲き香らしめませう。教会が余りに静かに座りすぎて居るやうだ、立ち上つて下さい。／○然し先づ旗を上る前に新に悔改め、更に深く祈り神より新しき聖能を頂きませう、『神の国』は日本より全世界の標語と意気もて殉教を覚悟してかゝりませう。十字架だ、十字架だ、キリスト教は十字架であります。／○視よ、愛は既に勝利の道に立つて居ります。オー神よ、全日本の信仰者を新しく洗ひ潔めて、力強く一人々々を起たしめて下さい。無神、無靈魂の

迷ひに入る青年達を救ひ出し給へ、利己的に走る資本家や労働者を愛の道に引戻して下さい。一日も早く神によれる全世界一致の日を来らしめ給へ、アーメン、キリストによりて願ひ奉る……アーメン
／○何卒、この靈魂の小さき祈りの上聞に達するやうにと、祈つて止みません。皆さんの御加禱をおねがひ致します。広く御利用下さい、早く三種郵便物の認可を頂き度いと存じます。／会友各位の御幸福を祈りつゝ、擲筆します。」

＊「感謝欄」『靈交』第174号、1933年5月10日

「一、金壺円也、香川、松本武雄様」

保奈美「編輯後記」同前

「○島も春風に垂柳が優しくゆれて、桜の蕾が大分美しく成った。窓を開いても忍び込む空気、なにとなく喜しく思はれる。工事する槌の音も朗かで、何処かで雲雀が鳴きさうに思はれる。春に決して罪はない、神の賜ひし春を汚すものは、蛇の智慧に躍る血である。／○故小林所長の追悼号として編輯しました。然し癪病院の一働き人の原稿は三読すべきものである。また生活の第一義も考えて頂きたい、決して癪の生活を飛びはなれた空想ではありません。／○回春の太陽は近く出版されませう、是れは癪問題に必ず貢献する所多いと自信して居る。また『雲なき空』の詩集も近く出版されませう。これは私の会心の作品のみである、何卒この二著の神の栄光の器として用ひられますやう、御加禱を願ひ上げます。／皆さまの御幸福を祈り上げます。」

ほなみ「靈交会内容」『靈交』第175号、

1933年6月10日

「靈交会を一寸御紹介いたします。

(一) 会員心得／一、会員はキリスト信者及び求道者たること。／一、会長は主キリストを戴くこと。／一、委員十二名を受洗者の内より全会員にて撰出

すること。／一、委員の任期は一ケ年とし、毎年春の復活祭に改撰すること。／一、委員は任期中、諸種の会務に当り、之を善処し、本会の発展に心を注ぐこと。／一、聖書を一切の会則となすこと。／一、集会を尊び、つとめて出席なすこと。／一、各々自発的に会務に励むこと。／一、毎月定期、又は其他任意、献金をなすこと。／一、春秋二回、昇天者紀念会をひらくこと。／一、永久退所者に金一封を贈ること。／一、国禁を犯し、又は六ヶ月以上、何ら理由なくして集会に出席せざる如き者は、委員の協議により適當なる処置をとること。／注意、入会志望者あるときは、本会の会員心得を能く話をなして、承諾を得て初めて会員名簿に登録すること。(以上)／これは、会以外の人々に靈交会とは如何なるものにして、入会せんと為れば何程の心得が入用であるかを知つて貰ふために、必要を認めまして作つてあるのであります。この心得に共鳴さるゝお方は、何時にても入会が出来ますし、又大いに歓迎を致します。前身が如何なる方にても、決して問ふ処はありません。量より質に重点を置きます故に、無理に誘引はせないし、去るを何処までも追ひも致しません、然し万一、退会者ある時は残る一同も神の聖前に悔改めと赦しを願ひ、且つ去る者の上に神の御導きを熱祈して止みません。／斯くて現在会員六十五名であります。

(二) 会員の種類／靈交会員の種類は、組合派に育ちし者、救世軍に生れし者、ホーリネス派の出者、メソヂスト派より、聖公会より、日基派の者、カソリック公教の人、等々のあらゆる派よりの出会であります、キリストを会長となして聖書の權威の下に絶対に一致しまして、誠に十五、六年の永き月日を経過致しますが、派とか組とかでイヤナ問題の一度も起つた事はありません。司会は受洗者が全部まわり番に当ります、そして其日の集会の様

式は司会者の思ふまゝに導いて宜敷ので、他は導かるゝに從ひます。要するに会全体の祈りが『キリストに栄光あらしめるやう』との一念に結合いたして居るのであります。／真に主なる父の神の栄光を希ふ者は、その祈りて『皆一つに成り得る』ものでありまして、各自が美しく育ちて行くものであります、誠に神の大なる御恵の繩でつなが合されます。

(三) 会の事業方面／事業方面は奉仕部を置きまして、極く困難な立場に居る兄弟『即ち故郷の家庭も貧しくて小使錢も送れない』とか『自分も重病にて作業に従事して〔役か〕所より小使を頂き得ない』と言ふ如き淋しき人々に、毎月幾分かづの小使錢の奉仕をさして頂く事であります。其金額が恥しい程に小額であります、一ケ年には金七十円に手が届きます、其他に極重症者など出来た場合とかの奉仕を加えますれば、壹百余円にのぼる次第であります。／次には斯の『靈交誌発行』でありまして、誠に貧弱な誌紙ではありますが、今年ヤツト約束郵便物の認可を頂きまして、部数は僅に六百であります、満洲から朝鮮及び内地は各方面に広く愛読されて居ります、英米へも送つて居ります。本誌の主意は我らの証でありまして、正直とな信仰告白と感想であります、是又たゞ神に栄光を歸し奉るこの外に悩める同胞への祈を送りたい願ひとの他ではありません。時折は柄にない大きな問題も述べますが、其時には何人かの質問に答へるべく記したことが多いのであります。万一にも神学の奥義を開かんとし、時事と宗教との關係を明かにせんとする言ふ如き考へならば、他に幾多の雑誌もあり、適人者もあります事は承知して居りますから、何卒お間違なく、我々としての信念を記すのみと思ひ下さいませ。たゞ一つ、神を否定するものには断然として戦ふ考へてあります。然して是れが費用は、一ケ年に百五十円は入りませ

う。／其他に病童日曜学校を致して居ります。

(四) 祈禱題目／我らの残されし使命は、『とりなしの祈り』であると示されてあります。然れば、朝に夕に一日も欠げなく祈禱会が開かれてゐます。夕方に島の小丘よりカンー、カアンーと静かな鐘の音が鳴り渡ると会員は、『祈の家』六間に二間に三尺の押入が三ヶ所付いて居るのですが、そのバラツク建の内に集りて司会者の導きによりまして、約一時間の祈会がたもたれます。其他の時間には随意で祈りに行きます、『残されし使命』の祈の題目は各地より頂きます。又各自がアラユル方面に祈りの心を走せては、神の聖前に祈りの香をたくのであります。／病気の重き者ほど、祈りの靈はハツキリ潔く冴えて参りまして、昇天の瞬間まで祈りつゝける者は珍らしくありません。永年の経験より申すれば、『昇天を赦さるゝ者は祈りの撰手』である事を確信いたします。上手な祈り人でなく、心にしみる祈人であります。浅く沢山に祈る人でなくて、深く深く祈る人であります。人を見て祈る人でなく、人を忘れて祈る人であります。／何卒、祈らして下さいませ、且つ御導き下さいませやう、願ひ上げます。

(五) こゝに兄弟あり／靈交会は永年の間と言ふものの、狭ひ共同生活の島に於て、苦しい立場に置られました。迫害も毎年二、三回は必ず起りました、『求道者の起る度に』、僅に二百たらずの人間の、然も親よりも兄弟よりも捨てられし如き境遇の者として、何ら悪い事もなく只キリストを信ずる友を一人得たことに由りて、全体より絶好と言ふ憂き言も耳にせねばなりませなんだ。然るに、黙し祈りて耐え忍びました。時には小刀を持って威脅されました。そうした時分に、神は常に兄弟を引合して下さいました。それが現在の会友諸君、即ち靈交の信者各位でありました。／遠きは祈を以て物質を以て、近きはワザワザ御訪問して下さいまして、靈交会を励

まして下さいました。祈の家の図書室には、二間の押入にホトンド一杯に種々なる書物がツマツテ居りますのは、我らが買ったものではありません、これらの著書が孤島不便の地に一步も外出のできない者の霊を糧として、強めて呉れし事でせう。一ケ年に三百五十余円の支出を、全部各地の兄姉がサ、エテ下さいました。肉親の者は発病と同時に遠去りましたが、主の血にツラナル方々が、『汝の兄ぞ、汝の姉ぞ』と各地よりこゝにありと名乗りかけて下さいました、然して是れみな地上の出来事とは思はれません、真に誠に一切は神の恵みの輝きの外ではありません。神の聖業の栄えと信じてゐます。／＼地上より捨てられし者は、天に属する兄姉を得ました。ハレルヤ、栄光神にあれ(完)』

*「感謝欄」同前

「一、金二円也、当所、高橋竹代様／＼一、金一円五十銭也、滋賀、西井知与様／＼右、厚く御礼申上ます。」

*「編輯後記」同前

「○筒井庄平兄は、天主教の信者で立派な信仰の人であり、熱心な祈り人として会員であられた、断食等も時々せられてゐました。誠に羨しい位の立派な態度で昇天せられました。／＼愛する夏が参りました。仕事の為め、机にシバリ附けられた如き編輯子の心は、山に渚に憧憬れつゝ、籠の島の如く窓より外を覗いては、「いゝ時候だなア」／＼○時々何か変つた食物が欲しいやうな心地がする、不思議だと思つても、其原因が判明せぬ、処が医書によると疲労の結果とある、其処で塩水一杯と砂糖一さじとを取ると、癒えた其上に疲労もなほりました／＼○頭髮をソリ落して撫でまはすと、フツト面白い感じがして、『頭が何となく可愛くなつた』、アコヒげのソリあとよりも、ソリ残りの此処や彼処の太い毛の一、二本が、大変の氣になつて妙にと

らはれる。その心の動きが面白く考へられました。／＼○手工の紙雛と城と自動車と等々を並べて見て居ると、『パパさんママさん』と言ひ度い幼心が一杯に湧いて来て、思はず手をたゝいて、何とも意味のない唄がうたいたくなりました。なつかしい私であります。／＼○今度、患者自治会の機関紙の主筆を申附かつてヤリかけましたか、小さくても社会は社会であると思ふ記事が集まる。コウルサイと言ふ感じと、是に捕れて生きる人の氣の毒さと思はれる。イサコサ言ふ為る事が、ホンニ氣の毒な限りであります。／＼○最少し大きな深い静かな明るい社会に住み度いものだ。私は太古の村落が、余程に理想的なやうに考へられてならぬ。果して現代の文明が幸福でせうかね。／＼○彼の雲の湧く処を見上げて、涯しなく旅立たい、行き止りの村里で何でも手当り次第に祈り、心で働かして貰つて對手より与へらるゝ儘に受けて、又旅立ちたい、途上に逢ふ人はナツカシク微笑を交して、冷水の一杯も掬てあげて、心よくサヤウナラして別れて行く。何物にも執着せず。彼の雲の湧く空を仰いて行き行きたいと存じます。親しい道連れとは、交互に真心より合掌しあいて！／＼○地上の聖濁一切を心の世界より捨て、祈り一つの我れに生かされたい。命ぜらるゝまゝ、報ひを望まずに働き、用が終れば忘れてしまつて、次の命に従ひたい。左様、なくてはならぬものは、『祈り一つ』、その他はやがて散り失せて終るものだから。／＼○さあ今月号の御用も終つた。これで精一杯であつたか……瞑想……私のそのまゝの姿であります。祈る姿であります。これて宜敷い、イザ忘れて次に行かふ。では皆さん、神の御恵の中に御暮しなさいませ。又次の村里で出逢ふかも知れません。その時は又親しく祈り合ひませう。デワさやうなら。」

*『編輯後記』『靈交』第176号、1933年7月10日

「○独りを尊ぶ人は立派な人格者であると思ふ、他人の前では自らを正しくするが、独りの時は乱れ易きものである。独りの時に神を思ふと最も良い。独りを尊くする人は強い人である。人間は結局は独りである。独りで病むで独りで昇天するのである。功罪ともに独りの責任である。独りを尊び、独りを潔くし、独りを強くし、独りを高くする事こそ大切である。／それには独りを確く神の上に立て、居らねば駄目である。人間は独りであるに、独りは誠に弱くて、群をなすと群集心理などと言ふ強狂者になるのである。／神によりて独りが完成されると、初めて他人と真に結合が出来得る、斯くてこそ、強き愛に活きぬけるものである。其処に主キリストの聖姿が味ひ得られるのである。／○室に帰つて見ると、机の上に誰か白百合の花を生けて香りを床しく立てゐるので、何より喜しかつた。先ず机の前に静座して瞑目を久しくしました。／カアネエシヨンの花と百合の花と、彼の園に咲く凡て其性を備へ、其姿を異にし、其香をバ違えてゐる……考える程に思ふ程に奇蹟である。神の業は実に尊い哉であります。一本の草を手にして智識を注ぐと、植物学上より一時間は考えられる。更に靈的に考えると、それが無限の思料になるのであります。／○私は雷が好きである、電光が好きである。彼の何も無い処に雲を巻き起して、然も勇ましく従往無尽に鳴りはためく音と、ピカピカと光矢を放つ有様は何とも言へぬ氣持がする。束ねた如き篠つく雨を、大地に叩きつけて大活動をやる。そして又もや跡型もなく消えて行く、実にサツパリしたものである。人生も神の靈より出で、勇ましく使命に尽して、余念なく神に帰り行き度いものであります。／○此頃編輯子は一日に二回ぐらひで、然も一回が一時間位い全身にブツブツと毒虫にサ、レタ時の如きもの

が出たり引込んだり致しまして、其度に少し発熱を覚えられ搔ゆがります。然し別に大した事はありません。／その発作を面白いものと思ひます。何も彼も皆が面白いと思えて来ます。凡てが今日の旅の空の一事件で、苦しくとも夕立にあいてズブヌレになつたぐらひの感じしか致しません。『我は旅人なり、宿れる者なり』と言つた聖者の心境がやゝ解されるやうに思はれます。我らの国籍は天にあり。／○癪問題が本格的に成つて参りました。永年救ひと根絶を叫んで歩んで来ました者として、何より喜しく思ひ居ります。一日も早く、斯の恐怖しき病苦より、祖国を全く救ひ出して貰ひたきものであります。／これは大なる社会浄化運動でありまして、一隅でのみヒソカに語つてゐるべき性質でありません。現在でも五十万以上の同胞の生死に關した問題であります。／○何卒靈交会を覚えて下さいませ。御示導下さいませ。残された使命に、最後まで走るべく鞭うつて下さいませ。靈交誌を御愛用下さいませ。二ケ年も信仰を捨てゐた人が、靈交誌によりて神に歸つた感謝状が参つて居ります。又、信仰なり教会に疑義を有して居りました青年が、信仰の確握をしたとの通信も呉れて居ります。又、左傾しかけた若者が、断然として神に歸つたとの告白も参つて居ります、其他に幾十通となく、神を讃へた手紙やハガキが参つて居ります。是は誌をば誇るのではありません。神が器として用ひ給ひます御恵を、感謝するものであります。／○今回約東郵便物の認可を得ましたので、郵悦が半減されましたから、沢山に発送が出来る訳でありますれば、悩める同胞も何卒御用命下さいませ。／又、御読了後は何人かに送つて頂きたきものと存じます。数部御入用の方には、喜んで御送り申上ます。／今号はこれで左様ならを致します。／皆さんの上に神の御恵みゆたかならむ事を祈り上げます。(終) 」

会計係「感謝欄」『靈交』第177号、

1933年8月10日

「一、金式円也、岡山、宮川量様／右、御礼申上ます、会計係」

*「編輯後記」同前

「○夏を何故に愛するか、神鳴の轟々たる音が好き、電光のキラメクのが好き、白雨の肺然として注ぐが好き、蚊が好き蚤が好き蠅が好き……これはマサカですが……実は病み疲れの軀には、寒さ暑さの徹へるのも一入であります、痲痺した手足のキ、が幾分か良くなるのと、ウス着で体の自由がよいのと、大いに助かる故であります／○多忙な一日の活かされも終りて、行水を貰つて床机の端に横になりて、グツタリと無心に夜空の星を仰いで居ると、小々蚊にサ、レても、少しく体を動す位で、アワテ、起きたくないし、更けて来ても寢床に這入たくもない、平和と満足とに有難い感じがして、此儘に明日の生命まで居り度い心地がします。／○不完全を嘆きつゝも、信仰に住まして頂く神の恵は、毎日毎夜の私の存在そのまゝが感謝である。この愚弱なる虫の如き私を、使命の中に今日も導き活かざるゝ事の尊さを考えると、多忙なれば多忙なる程、その疲労までが大なる生命の恵であるとか信ぜられなくて、其日其日の満足がシミジミと味はれて居る者であります。／○報知大島紙の編輯と、靈交の編輯と、評議員の自治会のつとめと、俳句の選評と、短歌の会と、修養団の向上会と、日曜学校の教授と、集会の感話と、聖書研究と、一日平均に二通の手紙の返事と、面会人と、各地への原稿と、雑略が斯る恩寵である。働き度くても一つの仕事も与えられぬ人もあるに、誠に有難いことである、私に何が出来る力があらふ……これを為して尚ほ何が為たい程の心のゆたかさは、聖霊の偕在の賜の他ではありません。／○島が段々と明るくな

る、癪問題の社会的の関心が深まつて来ました、早く拡張して、此の恐るべきものより祖国を浄化して下さい、皆様に宜敷く御願ひ申上ます。私も孤島に参りまして二十五年に満ちました。斯う長く活るとは思ひもうけなかつた者でありまして、不思議であります。確に活かさるゝ所に恵と使命とがある事を体験いたします。如何なる人でも神に活きねばなりません、如何なる場合にも祈を忘れてはならないと信じます。／○天国に行く迄は、人間学と霊学とを懸命に勉強せねばならぬと存じて居ります、現世は学校生活と同様で、本当の私の活動時代は天国に這入てからである。私は年を寄せる程に、体が弱くなる程に、卒業が近付きて実生活が迫つて来る感じが強くなりますので、希望は是れから後にかゝりて居ります。されば現在の苦難ぐらひに、屁古太礼ては居られません。私の望む天国は、楽隠居の如きツマラス世界とは思つて居りません。／では皆さま御壮健でお暮しなさいませ。」

会計係「感謝欄」『靈交』第178号、

1933年9月10日

「一、金式円也、三豊、高橋照市様／一、金五拾錢也、香川、植村徳太郎様／一、金壹円也、高松、一婦人様／右、御礼申上ます、会計係」

ほなみ「大島通信」同前

「○今年の夏は一入に暑くありまして、珍らしく大きな雷がハチハチと頭の上で鳴りますので気持がよい、昨夜などは途上に鳴り伏せられし者、恐怖の叫びを為す者などあつた次第でありました。世の終りの日に、天地の崩るゝ音の物凄さ等を想像して居りますと。心は何時の間にか、『主よ早く来り給へ』と祈りの内に這入て居りました／○癪根絶運動が本格になりまして、大島も五百五十名と言ふ大村となり、定員超過まさに五十名であります。しかるに後よりの申込み者は、押すな押すなの盛況

でありまして、千人に増員してもマタタク間に定員に達しませう、療養所の増設の爲め御尽力を願ひ上げます。伝染と決定した上は、血統の者のみの専売でなくて、何何の誰が犯されるか、実に皆さまの関心を要します。／○また一つの問題は、根治薬の発見に対する件でありまして、これは隔離法以上に大切な大事であります、この良薬が医界から出るか他の科学界より出るか又、意外の方面が発見するか、かくされた宝でありまして、面白い問題であります。されば、各方面の方々の御努力を希ふて止みません。故小林博士は、『癲根治薬の発見者は釈迦と同座すべき資格がある』と申されました／○靈交会は小さい集団として、神を讃へて居ります。二、三の兄弟も加えられました。残された使命の祈りも弱い者でありますれば、暑さに卜けて流れ、寒むさに凍てつく事のないやう、お励ましとお導きとお祈りを特に御依頼申し上げます。皆々懸命に信仰の走場を勇み進み得ますやう、祈つて居ります。余り他の方面に引き廻されますと、祈り心がうまく理屈でもつとも附けが多く成ります。／○生活の安定を得た私共と闘ひつゝけて居る生活とは、何方が人生の意味を為すかは考えものではありますが、とにかく社会の不景気が幾分か反影して来ます。然し、ソレダケ深刻なる社会相が考えられます、そして更に、信仰心と社会と言ふ大きな歴史的な問題が頭脳の中を走りまはります。社会の悔改めと言ふ事を思ひます。／○日本精神とキリスト教について、兼ねてより主張を有してきた私共は、最近に沢山に同様な信仰が擡頭して来ましたが、祖国の救ひの爲め、慶賀に絶えません。希ば、立派な大論文を以て堂々と明解する学者の出でむ事を祈ります。我らはキリスト教が日本を背負て立たねばならぬと言ふ奥には、我が国体に真に精神的に力を添ふる宗教はキリスト教であると信じて居

るのであります、私著『小さき者』参照／○靈交誌の増刷の結果、二、三十部は余るさうであります、何人にも御遠慮なく御申越し下さい、御送り致します。只神のため御使用になつて下されば、ソレデ満足であります。神ゆるし給へば、幾らでも増刷します、神止め給へば、明日からでも廃止いたします。部数も費用も、神の与へ給ふまゝに、其他にやらふとも存じて居りません。全然、神の事業と存じて居ます。／○人間も偉いが、偉さが知れて居ります、何程アガイテも、人一人贖ひ得ません。やれ、経済会議の何のと、全世界の人間が智慧のアリツタけを搾つて見ても、何一つ出来やせない實際を前にして、科学も哲学も思想も主義も何ですか、此上は聖靈の御力を希ふ外はない。要するに、神が最後の勝利であり給ふ、ハレルヤ」

＊「編輯後記」同前

「△夕立の過ぎし後の涼しさ、私共も凡て地上の物事には斯くの如くありたいと思ひます、決する処は、神の御聖旨か否かにのみ有ります、祈りよりスベカラク祈りへてある外はない。夕立の強さは後にミレンを残さずとも、確かなものであると存じます。／△良き処に種子を蒔くのはもとよりであります、何の折ある毎に何処へでも静かにソツト上手に蒔いて置くと、雨と嵐にシバキつけられた時に、立派に生えて来ます。レイレイらしく蒔く事のみ思ふ者は、伝道はムツカシイが、如何に処にも蒔く者にとつてはムツカシくない。ソシテ福音の種子は、蒔く程にフエテ来ますから大丈夫です／△汝らは刈入れまで四ヶ月ありと言ふに非ずや、視よ早や畑は色附けり……とあります。反宗教の、無神のと叫ぶが、其実は、民衆の心は眞の宗教、『活ける神を求む』て居るのであります。現代の人は教師然と職業者として嫌いますが、お前が俺がでやると、皆よろこんで耳を傾けますよ。レイマンよ立てよ、汝の働く畑は

色づいて居る。／△今日、愛生園より贈られたとてマスクメロンと言ふものを見た。所が学芸部長が、報知社長だからとて一片を呉れた。生れて始めて口にするのだ。書物では読で居たが、其処でサシ身の如くに切つて、記者連と試食した、味の知れない内に、ノドを過ぎた。皆うれしさに笑つた。ソシテ香気をほめ、味をほめ、水分をほめ、百年も生きのびる程の滋養があるやうに言ふ者もあつた。／△凡てが有難い、何でも嬉しい、面白い、別にクツクツはない。自分を客観なし得る私は、何事にも捕れなくなつた。『お前は張合の無い人間だ』と言ふ友がある。然し、これで私の人生は深いものに成つたのである。ソレハ如何の場合にも、其奥にユツタリとした自分が居る故である。／△祈りと言ふものは、この奥の私の仕事であつて、前で舞ふて居る自分の如き粗末な人間が本当に出来る仕事ではない。奥の私が祈る時にのみ、活る神の聖霊は降臨して下さるのである。また、奥の私が祈る事に於て、前への私が充たされるのであります。お解り下さるでせうか。祈りませう。／△山に市に伝道せらるゝ人々に、感謝いたします。大切な御役目であり、大切な御体であります、十分に祈り強め、且つ御自愛下さいませ、お祈りいたして居ります。／何程でも記したいのでありますが、他の原稿の御用が急いでまいりましたので、サヨウナラ致します。／では、皆さんの御幸福を御祈して擱筆いたします。(全完)」

＊「感謝欄」『靈交』第179号、1933年10月10日

「一、金壺円也、高知市、谷愛美様／一、金五拾銭也、若松市、小林ます江様／右、厚く御礼申上ます」

＊「編輯後記」同前

「○菊花かほる頃と相成りました。天の諸象、地の萬姿、ことごとく神の御栄光を忠実に現して造主

を讃美いたして居ります。紺碧の空、黄色の穂波、野菊咲くと吟じて美しい自然の前へに、清い友情の涙が湧き上つて参ります。涼しい星空のスキトホれる夜の更へ行く儘に、庭前の床机に腰を掛けて虫の啼く音に耳傾けて居りますと、胸の内には人間社会のみぐるしい争闘の叫び、無節操なるジャズ小唄の騒々しい、等々と思ひ合して、苦しい懺悔を世界にかはつて捧げてゐるのであります。斯る場合には何時も、人の世の街の一切を遠く離れ去りて、行雲流水を友として自然の中に生かさるゝ儘の清貧の自分を、風と和し水に合せ、虫と月と共に共に、無心の幼児の如く余念なく其時々神を頌めつゝ、残る生涯を送り度いと思はれます。然し、斯る退避的な清貧に恋すると同時に、進んで人間社会をパラダイスに為してこそ、神の聖旨を喜ばせ、真に理想の輝きで隔々まで潔まりて、人皆ともに心を一にし、思を一つにして、神を讃美する地上と化すべく、十字架の旗の下にたゝかふこそ使命であるとも思ひ祈るのであります。／○今月号も私の原稿で埋めました。神を示せば二、三の青年の兄姉へ送ります。言ひ得る程に浅ひものでなくしまして、より深くより親しい神であります。拙なるペンが示さんとアセツテ居る、『あるもの』即ち私の仰いで居る活ける神を視て下さいませ。また、『主なる神』は私のイエスに対する偽らざる告白であると同時に生活でもありまして、神を示せを更にウラガキする考えでもあります。三宅大兄の短文は、相変らず尊い靈糧であると言ふより、靈薬と申すべきであると信じ居ます。紺碧の空は、編輯の疲労した眼に望みし、昼と夜と朝との即吟であります。不完全ながら、久し振りに詩想が微笑いたして居るのをおぼえて居ます。／○五日間に七ヶ社に原稿を送つた。其間に集會に四回出席して相当に頭をつかつた。手紙を五通認めて、雑誌の編輯を二ツ済した。こ

れが今夏の日記の働きの絶頂である。二日間を端書二枚認めたのみで、発熱のため休んだのが、今夏の怠けた絶頂である。／○働き良き時候は日が短かいし、日の長い時は暑くて汗で紙が汚れるし、しかし、何もかもが嬉しい感謝である。／皆様の御幸福を祈ります。(全完)」

＊「感謝欄」『靈交』第180号、1933年11月10日

「一、金壱円也、神戸、塚田喜太郎様／一、金参拾銭也、神戸、奥座婦人様／一、金一円也、大島、奥村竹一様／一、金四円也、広島、中上悟様／右、御礼申上ます」

保奈美「大島たより」同前

「○古き建物は、二十六年に成りますので、改築が初まりました。先ず、此秋は家族舎一棟と特定室一棟とが改築されます、今や基礎工事が大分出来ました。／○教育係員が来られた大島にも、文化に努力せらるゝと同時に、徳育を更に努力されたきものと希望する、人格美の向上、そこに真の教育があると信ずる。／○船より船の旅の事とて、害毒を流す憂ひなく、長島への往復が多くなつた。過日は音楽会に招待され、今回は芝居に招かれて其道の代表者が参観した。／○十日には大角力を催し、中々にハズンなのであります。近く秋期大運動会が企てられて居ります。療養所の空も明るく、甚だ朗かであります。／○患者自治会の事業も大いに拡張されましたので、島の物価が大変に安く成りました。これは大成功であります。一本七銭もして居た鉛筆が、一本一銭になりました。今迄は外部の商人が運賃に名をかけて、暴利を取つて居たものらしい感がします。／○定員以上一割増の増員で、押すな押すなです、其上に療養所に理解した社会は、入所希望者が沢山です。増設か拡張かを痛切に感じます／○何と言つても、根本救済策は『根治薬の発明』にあります。此方面の努

力者の現れむことこそ熱望いたします。カクリ事業は根治薬なき処の、余義なき窮策の外でありません。／○第二大島丸と言ふ可愛い船が出来ました、御役所の便利は好いと存じますが、来客の爲めには余り変りありますまい。以前として、島は交通不便であります。／○紅葉する樹木のない大島は、秋の彩りが甚だ淋しくあります。仕事の間に一寸と外に出ても、目を慰むる何もなく、老松が倒されて雑然と建築物が立つて、殺風景な島と成つた悲しい感がいたします。何か工夫せねば、精神上に及ぼす点もよろしくない事もないか知らむと考えます。／○最近、何の故か丹毒患者が続出して居ます、暑中には伝染性の眼病が続出しましたが、今は全く治まりました。」

＊「編輯後記」同前

「○家外には灰色の空より、シトシトと大地に降り注ぐ音が、平和にひびいて居ります。二つの編輯を同時にやつて見ると言ふ働き振りに、自分ながら感心して居ます。／○隣室には基石の崩る、音が時々きこえて来る。何処か遠い方から、小説の音読するのが微かにきこえて来る。山の方から、ケタタマシキ百舌鳥の唄がきこえて来る。／○精神労働に疲るゝと神経が鋭くなつて、一寸とした音までがピンピンとひびいて気が引かるゝ。先日来の風邪を押して居るので、発熱もあるらしい。／○田舎で生れた自分は、稲の穂波の房々と黄色く揺らひて居る豊作の有様が目に浮んで、村雀の肥つた姿までが思はれて来る、島よりも町よりも農村がなつかしい。／○橙が色つく、柿が美しくなる、祭の大鼓が夜毎に鳴り初めると、芋の子が甘くなつて来る、釣竿を手にして行けば、ハゼが夕食の膳にのぼり、池から鯉の大きいのが上る。／○我が霊は神の外に頼らない、祈りて望む神の恵みを、我が内には絶えず何かしら祈りの火が燃えて居る、そ

れは恰も習慣と成つた如くで、それが生命と成つてゐる。／○私は全世界のために祖国日本を愛する、日本よりして正しき信仰、正しき政治、正しき思想が、全世界へ伸びて行かん事を祈つて止まないものである。／○世相よりしてアルマゲトンは近きにありて、キリストの御再臨も間もない事と思ふ、私は地獄に落ちても良い、それまでに唯一つの霊にても、天国行の資格に導き度いと祈りに祈つてゐます。／○今号の記念号は、甚だ多忙の内に編輯いたしました。出来る事なら、『靈交会の歴史』でも書くが、私の自伝を書くか致し度いと存じますが、神旨でなくはペンは執らない。／では皆さん御幸福で……さやうなら。」

＊「大島たより」『靈交』第181号、
1933年12月10日

「○私共、靈交会のクリスマス祝会は、来る十五日と確定いたしました、何卒万障御繰合せの上、御光来の程を御待ち致します。／○此頃に成りますと、毎年とも心を痛めます事が一つあります。それは、大風が吹きませんやうに、万ークリスマスと定めし日に海が荒て航海が止ると、次の日に延びますからであります。クリスマスには、子供のやうな事が心配に成りますのも、何だか意味がありさうに思はれたり致します。／○先日、印南久助兄が永眠せられました。長らく病床でありましたが、突然の出来事で驚きました、誠に御気毒に絶えません。弱き人間の悲しさを思ふと、暗涙にむせぶものが御座ゐます。／○十一月十日恵の日には、西村中佐殿を招かれて、皇国の有難き事を御講演によりて、十分に味はされました。又、先日の北陸大演習の際に、天皇陛下より中佐が拝領されました御紋菓を、一同に頂かせて下さいました。／○飯野十造先生より十一月の一日に、満洲国にも癩予防協会の出来た事の御知らせを頂きました。此の為め先生の

御尽力は、一方ならぬものゝあれし事と存じまして、厚く感謝致し居る者であります。」

＊「感謝欄」同前

「一、金五拾銭也、山梨、真藤千恵子様／一、金武円也、青森、芳賀栄様／右、御礼申上ます。」

＊「編輯後記」同前

「○誠に恥しい事のみ記して、今年も本稿ですみました……又、ペンを洗つて昭和九年の第一号より、奉仕さして頂く御恵に浴し度いと祈りつゝ御座ゐます。大きな感謝で御座ゐます。神のため同胞のための祈りに、斯くして生かして下さいる御憐みよ……。／○外には木枯しが颯々と老松の梢をゆり動かして居ります。荒れ狂ふ浪の中に、一舟が躍りつゝ漁て居ります。潮を吹きつゝ、迂り来る寒さが、綿ネルの肌着を徹して全身にシミ入ります。ペン持つ手の甲が、赤くフクレて霜焼けが痛みます。然し、内には祈りの火が燃え、感謝の喜びが充ちて居ります。／○祖国日本を愛します、福音よ、日本より輝き昇れ、彼の太陽の如く全世界へ、希ば神よ、日本人を申し給へ、と衷心より祈りぬれて居ります。先ず、其の準備として、九千万同胞を潔別なし給へと祈ります／○年末の清算はよろしく御座ゐますか、クリスマスを本当の祝典に致しませう。／皆さまの御精福を祈りつゝ、擱筆いたします。(全完)」

(つづく)

